

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成21年度派遣報告書

——インド・発展社会研究所、ヒンディー語、派遣期間(H22. 1. 11-H22. 3. 21)——

平成21年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程1回生

川中 薫

自身の研究テーマについて

私の研究は、現代インドにおけるアパレル産業、特に北部における中小アパレル産業で見られる生産物の特徴と雇用のありかたについて明らかにすることである。

インドの繊維産業は、豊富な天然素材と豊かな技術蓄積を背景にもつインドの一大産業で、そのシェアは国内工業生産額の14%、GDPの4%、総輸出額の17%を占める。加えて、農業に次ぐ雇用人口を吸収し、国内経済にとって重要なセクターとなっている。なかでもアパレル産業は、2005年の多国間繊維協定(MFA)による輸入数量制限(クォーター制)撤廃で、欧米向け輸出を大きく拡大させ、国内でも都市化と人々のライフスタイルの変化に後押しされ市場を拡大させている。国際的な競争力を持ちながら、インドのアパレル産業は、政府の政策上、小規模企業が多い。特に北インドは、ミシン50台ほどの小規模企業が多数ひしめき合う。

今回語学研修を受けたデリーは、北部のなかでも縫製業の盛んな都市である。インドの代表的な繊維産地ラージャスタン州ジャイプールから、色とりどり、様々なデザインの布が送られ縫製される。デリーの縫製工は、ほぼ9割以上が男性で、デザインの凝った婦人物の洋服を生産することが多い。一方南インドでは大きく異なり、縫製工のほとんどは女性で、比較的プレーンな紳士物を手掛ける企業が多い。作り手と生産物の関係に何か相関関係はあるのか、どのようにしてインドの豊かな繊維産業は形成されてきたのかをめぐる研究である。

研修言語の概要

ヒンディー語は、主に南アジア地域で話される言語の一つで、インドの連邦公用語である。インド国内では北部や中部を中心に使用されており、話者数は4億人にのぼる。国外では、隣国のパキスタンやバングラデシュ、ネパールなどで話者を持ち、重要な言語のひとつである。多様な言語、生活、文化が並立するインドにおいて、ヒンディー語は、人々の暮らしに根付いたローカルな言語のひとつでありながら、英語と同じように共通語として広く

認識されており、インドで研究を重ねるうえで重要な意味を持つ。

語学研修の内容について

今回の語学研修では、聞き取りと会話に焦点をあて、ヒンディー語の運用能力をのばす訓練を行った。前半 1 ヶ月間は、自身の研究テーマに沿った調査地に赴き、必要な単語のインプットと現在の聞き取り能力の確認を行った。後半 1 カ月半は、デリー大学社会学部東アジア研究科に通いながら、前半の調査で必要となった能力の訓練と理解できなかった疑問点を解決する作業を行った。

前半の実地研修は、デリーおよび、デリー郊外の産業地区に群生する中小アパレル会社を訪れ、縫製の生産ラインの見学と用意した質問のやりとりをするとともに、そこから紹介して頂いた様々なアパレル企業を訪れることで行った。

後半の研修は、博士課程の学生二人にチューターとして個人教授してもらい進めた。一人週 2 日、2 コマずつの授業を行い、全体としては週 4 日通った。テキストはなく、これまで撮りためたボイスレコーダーと調査ノート、辞書を使って授業を行った。授業は、挨拶から始めて、ディクテーション、会話と質問の練習をした。また、調査を兼ねた研修も継続した。

研修期間中に印象に残った体験や経験

研修期間中にヒンドゥー教、春の祭典ホーリーがあった。ホーリーは、インドで行われる祭典としては最大のもののひとつで、老若男女が一同に祝う。当日は交通機関がストップするほか、ほとんどの商店は休みになる。今回はデリーの友人宅に招かれて、前日からホーリー祭を体験することができた。ホーリーに特徴的な色水・色粉の掛け合いを体験し、甘いお菓子やホーリー料理を味わうことができた以上に、友人の親戚一同が集まる場に参加し、家族の皆さんと話をできたことがとても印象に残っている。

目標の達成度や反省点について

後半の研修期間中、目標としていた聞き取りと会話力の向上を実感することができた。語彙力が増えたこと、インドの繊維・アパレル産業に関する理解が深まったことに加えて、質問のコツを掴めてきたと思う。デリー大学のチューター二人は、より質問の意図が伝わる効果的な話し方を教えて下さった。拙いヒンディー語・英語に長時間我慢強く付き合ってくれたことにも深く感謝するとともに、素晴らしい機会を設けて下さった ITP プログラムに感謝申し上げる。



デリー近郊工場内の様子



バンガロール近郊工場内の様子